

ユダヤ人もギリシャ人もなく
めぐみ教会 創立記念礼拝 2025年4月13日

前奏 本日は受難週礼拝ですので、主イエス様の受難を心に留めて黙想しましょう。

開会讃美 聖歌450番『なにゆえ み神は』

祈祷 司会者

説教 導入

今朝は受難週礼拝と同時に創立記念礼拝です。創立記念はめぐみ教会の最初の主日礼拝が始まった日を記念して制定しました。この日土浦めぐみ教会は、この教会がアメリカ人宣教師によって始められたことを忘れないようにしているのです。喜びましょう。福音は誰でも何人でも救う普遍的力であることの証拠のようなものです。

昨年10月には、かつて10年間過ごしたインドネシアに行ってきました。ドゥクー教会のみんなと一緒に礼拝しました。1979年に洗礼を受けた21人のうち11人はすでに信仰を全うして天に召されていました。みんな、イエスキリストの福音のすばらしさを生き様をもって教えてくれました。彼らの信仰とその生きざまを通して、神様が教えてくれたのは、二つでした。

どんな国や文化圏に住んでいても、誰でも、罪の許しと、新しい命と永遠の命を与えてくれるものは、『キリストの福音の普遍的な力』でした。そしてそれ故に、教会という聖徒の群れが持つものは、『キリストの教会の世界性』(Universal Power of Jesus Christ, and Internationality of the Church)これが私が体験した真理であり、宣教師生活10年の私の喜びの告白です。これは聖書の神を信じた時に味わった祝福です。そしてこれは味わっても味わい尽くせない、奥深い祝福です。宣教地こそ私の留学地でした。

この二つの祝福はめぐみ教会の理念の一つとなりました。

グローバルな教会を（全人类的かつ国際的）

キリストの福音はいかなる民族、文化、国籍にあっても、信じる者を救う神の力である。それ故に、教会という聖徒の群れは、もともと全人类的なものであり、もともと全世界的なものである。教会が持つものは、『キリストの福音の普遍的な力』であり『キリストの教会の世界性』である。

この真理を告白する聖書の言葉が在ります。

ガラ3:26- あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをそ

の身に着たのです。ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。

理念はさらに続きます。

それ故、私たちはこのキリストにある世界性が、土浦めぐみ教会の中で体験出来るように企画し、若者達がやがて国際社会で貢献出来るように配慮する。

このキリストにある国際性をこの教会の中で、味わいたいのです。教会で味わう世界性 教会こそが味わうべきこの祝福を、味わっていないことは寂しいことです。『国際的(人種、民族、国籍、社会階層を超えた)』という意味です。この Internationality をもっともっと豊かに味わう群れになりたいのです。

実はめぐみ教会はきわめて国際的な教会です。私が主任牧師であった29年間でも、実に多くの他国籍のクリスチャンと一緒に礼拝してきました。インド、インドネシア、韓国、中国、ラオス、ネパール、台湾、フィリピン、タイ、マレーシア、カンボジア、シンガポール。またアメリカ、カナダ、ドイツ、フランス、スウェーデン、オーストラリア、ニュージーランド、メキシコ、ブラジル、コロンビア、ペルー、イラン、ケニア、実にいろいろ人と一緒に教会生活をしてきたのです。

今めぐみ教会内におられる、外国人の皆さんとの交わりをさらに深めて行きたいものです。この様な人々は、誰でも救う福音の普遍的力の証人のみなさんなのです。

さらに多くの外国人友人は、日本では留学生あるいは研修生ですが、日本人が好きの方々です。そして母国に帰れば、重要な立場で働く方々です。毎週一緒に礼拝していたのに、言葉を交わしたことが無いなんて、何とももったいない残念なことです。

外国に住んだことのある仲間がたくさんいます。外国に留学して学んだ人は数えきれません。さらに JAICA や様々な国際協力機構に参加して諸外国で奉仕した人達がたくさんいます。岡田、石上、古本さんは現在もパキスタンで国連職員として難民支援の働きをしています。

短期に外国を訪問したことのある人が大勢います。過去においても、ミッション ボランティアとして、日本人宣教師の働くバンコックに行き奉仕した経験を持つ夫人や青年たちがいます。そこのクリスチャンたちと親しく交わった経験のある人がたくさんいます。

教会の世界性、国際性、この祝福を、めぐみ教会内で味わっているでしょうか。若者たちは、この真理に目覚めているでしょうか。他民族の中に働かれる神の力を、教

会の若者たちに味わってもらいたいのです。コイノニアはその最高の場面、絶好の機会です。

現在まで韓国ソウル市の大方教会と交流があり、相互訪問した人は 900 名に達しています。2025 年には大方教会の中高生が来てキャンプをします。2026 年にはこちらから行く予定です。中高生をお持ちのご両親様、ぜひともこのような機会をご利用ください。コイノニアに送らないクリスチャン夫婦は、我が子を座敷牢に閉じ込めているようなものです。

イ・ヨンソンさんチェ・ヨンスさんご夫妻は、現在、コイノニアの祝福を博士論文にまとめています。

理念はさらに続きます。TMC の世界宣教

そして世界宣教の使命が教会に託されていることを告白する。私たちは世界宣教のために祈り、人を派遣し、支援し、様々な方法を通して、主の宣教命令に忠実であるように努力する。また世界宣教を担う献身者をいつも生み出し、育成する教会であることを追求する。

また『キリストの福音の普遍的な力』故に、異文化圏の人々に、福音を伝えることが重要なのです。国外宣教は、その国にニーズ、まだ福音を聞いていない人がたくさん居るからするものではありません。もしそうなら日本は最も宣教師を必要とする国になります。

1975 年丁度 50 年間です、初めてアメリカに行ったときです。フィラデルフィアの教会に行って、宣教師になってインドネシアに行くと証しました。すると時、一人の婦人が寄ってきて言うのです。「インドネシアでは日本語は通じるのか?」「いいえ、インドネシア語を学んでから奉仕します。」すると強い口調で言われたのです。「それならあなたは行くべきではない、日本語で日本人に宣教しなさい。」続けて言ったのです「私たちはアメリカから、大勢の宣教師を日本に送っているのだから、あなたは日本から出て行ってはいけません。」率直な当然と言えば当然の言葉でした。戸惑ってしまい、翌日その方に応答しました。

『主イエスは、世界宣教の命令を、弟子団に命じたのであって、ユダヤ人国家に命じたではありません。世界宣教の使命は教会に与えられたのであって、国家に与えられたではありません。確かに日本は、アメリカ人宣教師を受けていますが、アメリカから宣教師を受け入れているのではなく、アメリカに在る教会から受けているのです。アメリカでは、大教会だけでなく田舎の小さい教会にも世界地図があり、宣教師をサポートしています。日本に在る教会も、小さくても、この世界宣教の使命に忠実でありたいのです。それで私を派遣するのです。』

宣教命令は国家や民族ではなく教会に与えられた命令です。

大きな国だから小国に宣教師を送るのではありません。クリスチャン人口が多い民族だから、クリスチャン人口の少ない民族に派遣するのではありません。経済大国だから、開発途上国に派遣するのではありません。大国意識や民族的優越意識、あるいは経済大国意識を動機とするものは、キリスト教会の世界宣教とは違うのです。

教会は、福音が、誰でも救う普遍的良き知らせだから、まだ知らない人に分かち合うのです。世界宣教をするのは、宣べ伝えようとするキリストの福音が、どんな文化圏の誰でも救う本質的に普遍的な力だからです。

では教会に委ねられている世界宣教の使命を、この教会は果たしているでしょうか。今までにめぐみ教会は、宣教師を外国に派遣して来ました。日系ブラジル人のみなさんに福音を伝えるためブラジルへ鈴木夫妻を派遣しました。河村桂師をタイへ派遣しました。現在は牧師夫人として岐阜県で素晴らしい奉仕しています。韓国セロナム教会日本語集会へ 新井愛希師、大阪ヨシア師を派遣して数年間支えました。

さらにめぐみ教会は TCU の外国人留学生を、実習神学生として受け入れ、支援して、教職育成をしました。

また土浦めぐみ教会は、現地神学生の支援をしてきました、

50年前、めぐみ教会は、インドネシアに行った、わたしたち家族を支援してくれました。当時一人の神学生の学費と生活費に月 5000 円が必要でした。このめぐみ教会は、朝岡師の時代に、スドモ神学生を育ててくれました。私の時代から今日に至るまで、スドモは神様に用いられ、ドククー教会は大きく成長しました。めぐみ教会の家族、親戚のような教会が存在しているのです。18 歳だったスドモはすでに63歳になりました。ドククー教会は後継者が必要です。第 2 のスドモのために祈ってください。

教会の国際性とは土台で在り、かつ目標なのです。

福音の普遍性に基づく教会の国際性は、教会の土台で在り、また理想です。まだ完全には実現していない目標なのです。私たちが世界の人々と、人種 民族 国籍を超えて親友をもっているか、私たちが国際的な視野を持って、諸民族と相互尊敬して、供に痛み供に喜んでるか。世界中の人と宇宙船地球号の乗組員として、仲間になっているか、祈りの課題です。

最後に、国際的な教会でこの世界性を豊かに味わうこと、また異文化圏宣教を支え、推進することは、結局は私たち自身の成長になるのです。

例えば、他国あるいは多民族に対する偏見や差別意識からの脱却です。自分の内側に他民族に対する差別意識を認識することは、不可能に近く難しいものです。実は誰でも、自分は差別なんかしない、差別意識なんか無いと思っているです。当たり前として持っている差別意識は、無自覚だからです。

その埋もれている無自覚の差別意識を認識させてくれる最善の方法は、差別について学ぶことより、一人の外国人の友を持つことです。自分と違う異質な友を持つことが重要です。そして「あなたから差別を感じました。」と指摘されることが、自らの奥深くに巣くっている差別感覚を克服する、最初の最善のチャンスなのです。

自国や自国の文化は、他の国と違って優秀だなんていう歪んだナショナリズム(自国優先思想)から脱却するためには、異文化を体験することです。この無知からくる優越意識や差別、隔ての壁を自覚し、克服する方法は、異質な外国人の親友となることです。人がみんな外国人の親友を持つならば、外国人に対する軽蔑や意地悪や恨みや敵意が無くなり、民族、人種、国境や国籍にとらわれない真のコスモポリタン国際人に成れるのです。その時、私たちはこの世界で平和を造るものに成るのです。その時、世界から戦争は無くなり、地の上に神様の御心が成就することでしょう。

応答讚美 讚美歌 234 番 A 『昔主イエスの撒きたまいし』

祝 禱 ガラテヤ 3:26 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。